

平成28年3月

正井三枝子 学位論文審査要旨

主 査 吉 岡 伸 一
副主査 前 垣 義 弘
同 兼 子 幸 一

主論文

Residual symptoms were differentially associated with brain function in remitted patients with major depressive disorders

(寛解状態の大うつ病患者において、残遺症状は異なる脳領域の機能障害と関係する)

(著者：正井三枝子、朴盛弘、横山勝利、松村博史、山梨豪彦、板倉征史、杉江拓也、三浦明彦、長田泉美、岩田正明、兼子幸一)

平成28年 Yonago Acta medica 59巻 15頁～23頁

参考論文

1. 辺縁系脳炎の精神症状、せん妄にblonanserinが奏功した症例

(著者：井上郁、横山勝利、正井三枝子、兼子幸一)

平成28年 最新精神医学 掲載予定

審査結果の要旨

本研究は抑うつ症状の客観的評価尺度ハミルトンうつ病評価尺度17項目 (HAM-D17) の総得点が7点以下と操作的に定義した寛解を満たす大うつ病患者で、うつ病自己評価尺度 (CES-D) に基づく残遺抑うつ症状と、自記式社会適応度評価尺度 (SASS) 及び言語流暢課題施行中に近赤外線スペクトロスコピー (NIRS) を用いて測定した前頭及び側頭皮質領域の酸素化ヘモグロビン変化量との関係を検討したものである。その結果、対人関係における過敏性などの残遺抑うつ症状は社会機能と強く関連し、しかも、この残遺症状には前頭前皮質及び側頭皮質という異なる脳領域の機能障害が関係する可能性が判明した。本論文の内容は、精神医学の分野で、寛解状態にある大うつ病患者治療における、主観的な残遺抑うつ症状を治療対象とすることの意義を示唆するものであり、明らかに学術水準を高めたものと認める。